

第38回 アジア獣医師会連合 (FAVA) 代表者会議及び 第19回 FAVA 大会の開催

平成28年9月5日(月)～9日(金)、ベトナム国ホーチミン市の Tan Son Nhat Saigon Hotel において第38回 アジア獣医師会連合 (FAVA) 代表者会議が、White Palace Convention Center において第19回 FAVA 大会がそれぞれ開催された。FAVA 代表者会議及び FAVA 大会について、それぞれ出席した日本獣医師会の藏内勇夫会長及び古賀俊伸事務局長、また、日本産業動物獣医学会の中尾敏彦前会長からの報告を掲載する。

1 第38回 アジア獣医師会連合 (FAVA) 代表者会議

藏内勇夫 (日本獣医師会会長)、古賀俊伸 (日本獣医師会事務局長)

9月5日(月)の会議では、まず、アチャリヤ・サイラスト事務局長から出席者の紹介が行われた後、主催者の FAVA シェーン・ライアン会長 (シンガポール獣医師会会長)、ホスト国ベトナム獣医師会のダウ・ゴック・ハオ会長、世界獣医師会レネ・カールソン会長及び OIE マレー特別顧問の挨拶が行われた。

次に前回 (第37回) 代表者会議 (モンゴル国ウランバートル市) の議事録が確認され、承認された。続いて、カンントリーレポートとして、参加国から状況報告が行われた。

日本の藏内会長からは、①本年11月10、11日に福岡県北九州市で開催予定の第2回 世界獣医師会 (WVA) - 世界獣医師会 (WMA) “One Health” に関する国際会議 (2nd GCOH) に関する報告と FAVA 加盟各国の代表者の招待、②来年度から研修生を受け入れる予定のアジア地域臨床獣医師研修事業 (Training Program for Asian Veterinarians : TP-FAV II) の準備状況の説明並びに FAVA 加盟各国からの研修生候補者の推薦の要請を行った。

その後、ライアン会長、アチャリヤ事務局長及びバンバン・ボンジョ・プリオセリヤント財務担当役員 (インドネシア) から会務報告が行われた。その中で、アチャリヤ事務局長から、ネパール地震の際の日本からの寄付金送金について報告された。また、タジキスタンからの入会申し込みについて討議し、入会を承認するとともに、中央アジア諸国 (カザフスタン、キルギスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン等) についても、アフガニスタン代表から入会勧誘の連絡を試みることもされた。

さらに、ライアン会長から、前回代表者会議の後にオンライン投票で実施された、会則、施行細則の改正に関

しては、各国から投票がなされず、本会議での協議が求められていることが報告され、協議に付された。おもな改正点は以下のとおりであった。

①会長1人、副会長2人として、副会長は前会長及び次期会長が当たる。

②会長の留任を認める。

③ FAVA 大会開催国は、参加者1人当たり10米ドル (最低額5,000米ドル) を FAVA に納入する。

本件について、異を唱える国はなかったため、事務局が会則、施行規則改正案を整え、各国へメールで送付し、確認のうえ承認を得ることとされた。

併せて、新役員 (2016年9月5日から2年間の任期) が以下のとおり選任された。

会 長：ダウ・ゴック・ハオ (ベトナム)

前 会 長：シェーン・ライアン (シンガポール)

次期会長：ヘル・セティジャント (インドネシア)

財務担当：ポール・チェリヤー (ベトナム)

監 事：サイド・ガル・サフィ (アフガニスタン)

事務局長：アチャリヤ・サイラスト (タイ)

事務局長代理：バンバン・ボンジョ・プリオセリヤント (インドネシア)

翌9月6日(火)の午前の会議では、まず、韓国から、来年8月に仁川 (インチョン) 広域市で開催される第33回 世界獣医学大会 (WVC) の準備状況の報告と各国獣医師の参加要請が行われた。また、次回の第39回 FAVA 代表者会議は、翌年、韓国のインチョンで WVC の会期中に開催されることとされた。なお、第20回の FAVA 大会は、2018年インドネシアのバリで開催されることが確認された。2020年の FAVA 大会には、マレーシア及びフィリピンが開催国として立候補することを表



図1 代表者会議記念写真：前から2列目中央 藏内会長，右隣がアチャリア FAVA 事務局長と
カールソン WVA 会長



図2 歓迎レセプションでのノンラム大学獣医学生の郷土
舞踊



図3 大会会場内でのノンラム大学ブース
学生による会場・市内案内等

明したが、決定は次回の会議で行われることとされた。

次に、世界動物愛護協会との連携体制（動物愛護に関するオンライン教育及び教育カリキュラムの統一等に関する覚書の取り交わしについて）及び第2回アジア動物福祉大賞（ピーター・スロンブ大英連邦獣医師会連合会長の受賞について）に関する報告が行われた。さらに、アジア保全医学協会及びベトナム国立大学ハノイ校（畜産関係の展示イベントの実施について）からの状況報告等が行われた。

また、WVAと連携して継続教育に関する事業展開を行っている世界継続教育連盟が提供するオンラインシステムについて説明がなされ、本件については、後日、事務局から各国に加入に対する意向を聞くこととされた。なお、ネパールはすでに加入し、自国のホームページにリンクしている旨報告された。

さらに、前回会議で協議されたFAVA Strategic Plan (FAVAにおける戦略計画)について、ライアン会長から説明が行われ、了承された。なお、現在FAVAの会

員で、何ら活動を行っていないインド、バングラデシュ、パキスタン等にも事務局から活動への参加を呼びかけることとされた。

最後にハオ新会長（ベトナム）から挨拶が行われ、代表者会議は閉会された（図1）。

同日、午後には、ノンラム大学の動物診療施設、疾病診断に関する研究室及び附属牧場を見学した。

夕刻には、レセプションが行われ、ノンラム大学の獣医学生により、ベトナム各地の歌と踊りを紹介する演目が披露され（図2）、学生の見事な歌、踊り、演技に参加者は注目した。代表者会議、大会を通じて、オレンジ色のユニフォームを着用した獣医学生たちは、積極的にイベントに携わり獣医師会と若い世代との連携の強さを感じた（図3）。

一方、2nd GCOH, TP-FAV II に対する評価はいずれの国からも非常に高く、会議の休憩時間や、各パーティーでの各国代表との会話において、日本獣医師会に対する感謝の聲が寄せられた。

2 第19回 アジア獣医師会連合 (FAVA) 大会

中尾敏彦[†] (前日本産業動物獣医学会長)



本大会は、FAVA、ベトナム獣医師会並びにホーチミンにあるノンラム大学の3者の共催によるものであったが、実質的には、ノンラム大学のスタッフと学生によって運営された。大会の企画は、畜産国らしく、豚、鶏、牛のセッションと One Health のセッションが主体で、伴侶動物に関するものはいつもより少なかった。

参加者数は25カ国から合計1,070名と発表されたが、正規の登録者は582名で、他に、展示企業の関係者が120名、さらに、登録なしの参加者も多数含まれていると思われた。国別には、当然、地元ベトナムの参加者が最も多く、日本からの参加者は10名程度で、2017年に世界獣医学大会(WVC)を開催する韓国からは約30名が参加した。

各セッションへの一般発表演題の申込数は96題で、この内63題が口頭発表で、残り33題がポスター発表であった(表)。実際に口頭発表が行われたのは61題であった。96題の半数は、ベトナム国内からの申し込みで、次いで多かったのは、オーストラリアであった。日本からの申込数は8題で、外国では3番目に多かった。この他、欧米の著名な専門家による12の基調講演が行われた。

大会初日(9月6日(水))の夜には、歓迎レセプション

が盛大に開催され、本大会の運営主体となった地元ノンラム大学の学生たちがステージで繰り広げるプロ顔負けの歌や踊りなどのアトラクションを楽しみながら、コース料理と飲み放題のビールで、会場は大いに盛り上がった。

大会2日目(9月7日(木))には、開会式が行われ(図4, 5)、FAVA会長の歓迎挨拶に続いて、WVA会長、OIE特別顧問などが祝辞を述べた。開会式に引き続いて、昼食をはさみ、5つの基調講演があり、午後3時過ぎから、5会場に分かれて、一般講演の平行セッションが行われた。一般講演は、発表15分、質疑応答5分で、モデレーターの手慣れた進行で、活発な議論が行われた。筆者もこの日の午後3時からルミナントのセッションの最後に繁殖関係の講演を行ったが、質問が多く、座長の判断で時間を大幅に延長して、中身の濃い議論が行われた。

大会3日目(9月8日(金))の夜には、大会のハイライトとも言える晩さん会が、大会場からやや離れた、市内の高級リゾートの大ホールで開催された。ここでも、学生ボランティアたちのプロはだしの歌と踊り、飲み放

表 各セッションの演題数

セッション	口頭発表	ポスター発表
Swine Medicine & Production	15 (1)	10 (1)
Poultry Medicine & Production	12 (1)	4
Ruminant Medicine & Production	7 (1)	7 (2)
Companion Medicine	4	6
Nutrition & Animal Health	3	
Veterinary Education	3	
One Health	11 (1)	
Aquaculture & others	2	
Others	4	
One Health & others		6 (1)
合計	61 (4)	33 (4)

注：() 内は日本からの発表数



図4 開会式：冒頭の獣医学生による国旗掲揚と国歌斉唱



図5 開会式：多数の参加者が出席

[†] 連絡責任者：中尾敏彦

〒067-0003 江別市緑町東3-111-31 ☎・FAX 011-398-6705 E-mail: rakunonakao@kyp.biglobe.ne.jp

題のビール、コースのベトナム料理で、大変な盛り上がりであった。

ちょうど隣のテーブルではモンゴルからの10数名の参加者が盛り上がっていて、筆者も一時これに加わり、日本の相撲の話で交流を深めた。

学会最終日(9月9日(土))は、朝から3題の基調講演が行われた後、閉会式が執り行われた。まず、WVC 2017 Koreaのインパクトの強いプロモーションビデオの上映の後、企画広報委員長(ソウル大学教授)から参加要請の挨拶があった。韓国からの参加団は、本大会の期間中も組織委員会のブースの一角で活発な広報活動を行った。韓国獣医師会長によれば、約4,000人の参加を目指しているとのこと。

次いで、本大会の組織委員会代表から、本大会のまとめが報告された。

- ①スポンサーの協賛区分は、ダイヤモンド区分6社、ゴールド区分6社、シルバー区分8社、その他の区分10社。
- ②パラレルセッションでは、9つのトピクスで合計17セッションが実施された。
- ③基調講演数、一般発表申込数、参加者数などは、既述のとおりであった。
- ④本学会のハイライトは、PRRSに関する基調講演とセッションであった。
- ⑤学会運営のために、ノンラム大学の学生150名がボランティアとして参加していた。ボランティアは大会の運営の他、歓迎レセプション、開会式、晩餐会などにおけるずばぬけたパフォーマンスなどで大きく貢献していた。
- ⑥大学院生の口頭とポスター発表の中から、特に優れたもの1題ずつ(フィリピンとベトナム)に、奨励賞が贈られた。

引き続き、次回のFAVA大会(10月1~3日、バリ島)開催国インドネシアによるプロモーションの挨拶があった。もっとも、インドネシア参加団はすでに帰国しており、FAVA事務局長が代理を務めた。これで、閉会セレモニーが終了し、その後のランチで、本学会のプログラムがすべて終了した。

ランチ終了後、ノンラム大学の招きで、近郊の酪農場視察に出かけた。参加者は、オーストラリアのクイーンズランド大学の教授(獣医繁殖学)、クイーンズランドの国際コンサルティング獣医師(ノンラム大学特任教授)、ベルギーのリエージュ大学教授(獣医繁殖学)、米国アーカンサス大学教授(家禽科学)と筆者の5名。

最初に訪問したのは、Vietnam-Israel Demonstration Farmで、暑熱対策を始め、随所にイスラエルの酪農技術が取り入れられており、イスラエルの専門家が1名常駐していた。ベトナムで飼育される乳牛22万頭の



図6 ホーチミン郊外の個人農場

うち、約10万頭が大消費地ホーチミンとその周辺で飼育されており、この農場は、地域酪農の指導的役割が期待されている。搾乳牛約90頭で、3回搾乳、VWP (Voluntary Waiting Period)は70日、分娩後初回AI受胎率は22%で、平均空胎日数140日。おもな疾病は、蹄病と乳房炎。飼料は、キンググラスなどの青刈り飼料、コーンサイレージ(近隣の農家からデントコーンを購入し、場内のトレンチサイロで調製)、輸入乾草、配合飼料など。乳牛の栄養状態はおおむね良好で、育成牛に力を入れているというだけあって、若い牛の発育も良好であった。課題は、やはり、暑熱対策と繁殖成績向上とのこと。農場全体に活気がみなぎっていて、イスラエルの専門家、ベトナム人獣医師、従業員などが意欲的に農場運営と技術の向上に取り組んでいることから、今後の発展に期待が持てた。

次に視察したのは、家族経営の牧場。豚舎を簡単に改造した牛舎に24時間つなぎ飼いで、44頭を飼育し、内16頭が搾乳牛(図6)。もともと養豚農家であったが、5年前に、他の酪農場をみて、毎日収入のある酪農経営に転換した。畜舎の半分は、まだ、豚舎のままであった。

飼料は、農地がないため、いずれも購入で、稲わら、野菜くず、青刈りの草、デントコーンサイレージなどであり、乳価は、乳質によって、リッター当たり8,000~14,000VDN(ベトナムドン)(35円~61円程度)で、この牧場で生産される牛乳の乳価は最高レベルの14,000VDNとのことであった。また、飼料の制約があるため、増頭の計画はなく、課題は、やはり、乳房炎と蹄病、そして、繁殖成績の不良であるという。牛床は硬いコンクリートで、敷料もマットもなく、牛はここに24時間繋がれたままなので、当然、肢蹄疾患が多く、発情発見も困難と思われた。オーストラリアの専門家達は、狭くてもよいから、運動場を設けて、1日1回は、歩かせるようにと助言していた。農家の若主人としては、毎日一定の収入もあり、今のところ、現状を大きく変えようという気はないように見受けられた。気になっ

たのは、牛の健康、栄養、衛生、繁殖などに関する基礎的な知識があまりなさそうなことで、農家レベルでの酪農振興の課題と思われる。

ベトナムでは、牛乳とともに牛肉の消費量も増大しており、今年も、オーストラリアから275,000頭の肉牛を生体で輸入したとのこと。ベトナム政府にとっては、乳牛だけでなく、肉牛の頭数増加も重要な課題になっているようである。

勤勉で向上心の高いベトナム人の手で、成長産業とさ

れる酪農と肉牛生産がこれからどのように展開され、これまで必ずしも存在感が強くなかった獣医師達がそれのようにコミットしていけるか、楽しみに見守りたい。

FAVA大会に出席し、アジアの多くの獣医師達と交流することは、地域の獣医学や獣医療の抱える課題を共有し、将来を展望するうえで、有意義なことと思われる。次回のバリ島での開会に多くの会員が参加されることを期待したい。